

2つの人類起源論と人類のこれから

古市 剛史

ここ数年、「最古の」人類祖先の化石の発見が、アフリカ各地で相次いでいる。見つかった化石は、3次元デジタルサイザーや電磁波断層写真の技術などによってこれまでよりはるかに多くの事を語るようになった。また、数千年も前の骨からDNAを抽出してその骨の持ち主のルーツを探ったり、世界各地の現代人の血液からとったDNAを比較して最初の人類の発祥の地を探ったりという新しい研究方法も台頭してきた。学生のころ、退屈で仕方なかった形態人類学が、とつぜんスリリングな学問に変わってしまったのである。

もっとも近縁のチンパンジーやボノボとの共通祖先から分かれて最初の人類が誕生したのは、DNAの研究からおおよそ500~700万年前だと推定されている。これに対して、一昨年東アフリカから見つかったオロリンと命名された化石は、約600万年前のものだと推定されている。もしこれが、人類直系の祖先だとすれば、「ミッシングリンク」は、もはや存在しないことになる。

数々の発見によって明らかになってきた人類の初期の祖先の姿は、手に槍をもってサバンナに歩み出し、高度な知能で動物をしとめて生活していたというそれまでの想像を覆すものだった。初期人類の脳のサイズはチンパンジーとほとんど変わらず、石を打ちかいてごく初歩的な石器を作るようになったのはようやく250万年前から、槍などを用いて本格的に狩猟ができるようになったのは高々数万年前からだということがわかってきたのである。それまでは、動物食といっても、肉食獣に殺された動物の残りをあさる死肉食が中心だったと考えられている。類人猿の共通祖先と明らかに異なるのは、初期人類の段階で現世人類なみの直立二足歩行がほぼ完成していたということだけだ。

ならばどうやって、初期人類は乾燥化が進む厳しい環境で生き延びることができたのか。この点については、まだこれといった定説がないが、私自身は、二足歩行による運搬能力の向上が、サバンナでの生存を可能にさせたと考えている。類人猿段階でとっていた、集団の全てのメンバーと一緒に遊動して生活するというスタイルを捨て、子供や妊婦などを安全なシェルターに残し、動きの取れるオトナの男女が運搬能力を活かして遠くから食物を持ち帰るという半定住型の生活にシフトする。こういった生活こそが、食物の密度が低いサバンナで、高い子供の死亡率を補うために複数の乳幼児を同時に育てなければならなくなった初期人類が取り得た唯一の方法だったのではないかと。類人猿段階から育児を一手に引き受けていた女はともかく、それまで一切育児に加担しなかった男が食べ物を持ち帰るようになるには、確実に自分の子供が認識できるようにならなくてはならない。それまでの乱婚的性関係から特定された性関係に変わり、集団のなかに核家族的なまとまりが形成されていったのも、この一連の変化のひとつだと考えている。

このように、高い知能も道具も持たずかつかつのサバイバルを演じていた初期人類の姿が明らかになるにつれ、そのころの人類はまだ人類ではなかったと考える研究者も多くなってきた。類人猿との共通祖先から分かれた最初の時点に人類の起源を置くのではなく、「人類らしい」特徴を備えるよう

になった時点の祖先を人類の起源だと考えようというのである。トートロジーとしかいいようのない考え方だが、人類は特別に作られた生き物だと考えたがる人々には、この方が受けがいい。

この意味で、「真の人類」といえるのは、今から3~4万年前にヨーロッパに現れた、クロマニヨン人という名で知られる新人だ。人類の使用する道具は、250万年前に最初の石器が発明されて以来きわめてゆっくりとしか進歩していなかったが、新人の登場とともに一気にバリエーションが増え、槍や釣り針、衣服を縫う針までもが登場した。大型獣の狩猟は日常的に行われ、洞窟には宗教的世界を思わせる多数の壁画が描かれるようになった。これならたしかに、人類の祖先として満足できる姿だろう。

ところが数年前、この新人のルーツをめぐって、欧米の研究者の自尊心を逆撫でするような研究が発表された。世界各地の現世人類の血液から、母方からしか遺伝しないミトコンドリアのDNAを抽出してその塩基配列を比較したところ、新人の最初の母ともいべき人はアフリカで生まれたというのである。今から10数万年前にアフリカで生まれた新人は、その後徐々に広がって3~4万年前にヨーロッパに広がり、それと同時に中東を経てアジアにも広がった。その後新人は、筏などを用いてオーストラリア大陸やその周辺の島々に移り、一方で、当時陸続きだったベーリング海峡を渡って北米に達すると、たった千年という驚異的な短時間で南米の南端にまで達したというのである。「ミトコンドリアイヴ仮説」と呼ばれるこの仮説は、さまざまな学術的・感情的反論を受けてきたが、最近の議論の動向を見る限り、このストーリーに大きな変更はなさそうだ。

新人が世界中に広がった時期、それ以前にヨーロッパやアジアに広がっていた原人やネアンデルタール人はどうなったのだろうか。これについても様々な角度から研究が進められているが、どうやら混血や融合といったことは少なく、新人は基本的にはそれ以前の人類を滅ぼしながら進んだらしい。人類だけでなく、新人が駆け抜けた北米大陸では、この時期に多数の大型動物が絶滅している。人の祖先は、進歩した強力な武器を手にしたとたんに、獲物や敵対者を滅ぼしながら自らの勢力域を拡大するというたぐいまれなる才能を発揮しはじめたのだ。

自分にとって都合の悪い他種の生物は可能なかぎり排除し、自分の食物となる生物は可能な限り殺して食べ、自分と同じ種類の他の個体との競争に勝って、少しでも自分が得をして多くの子孫を残す……。これは生物の本質ともいえる行為であって、それ自体が悪いというわけではない。しかし人類は、そういった遺伝子レベルの行動パターンを本質的に変化させないまま、これまで地球の生物が手にしたことのない巨大なエネルギーと高度な技術をあやつるようになってしまった。ままごとや戦争ごっこをする子供たちに、本物の包丁や刀を与える親はいないだろう。それは、子供にはまだそういった大きな力をもつ道具をコントロールするだけの思考力や理性がないと考えるからだ。人間が、自分の身になんら危険を感じることなくボタン一つで多くの人を殺せるハイテク兵器をもつことには、それによく似た危なっかしさを感じる。

600万年ほど前に生まれ、5万年ほど前に世界中に広がりはじめた人類も、その総人口が目に見えて増えだしたのは、たった1万年前に農業が始まってからだと言われる。さらに、等比級数的な人口爆発が始まったのは、わずか200年前の産業革命のころだ。現在の人口は、産業革命前の約6倍、農業革命前の約120倍にもなる。このような爆発的人口増加が、今後急速に収束するとは考えられず、人類は早晩土地不足、資源不足、食物不足、環境の極端な悪化といった問題に直面するだろう。その

とき人類は、自分たちの強大な力をコントロールするだけの社会的理性を発達させ、異なる国々が手に手をとって生活レベルを下げ、共存への道を探るのだろうか。それとも、背に腹は変えられずと、武力を使ってでも自分の民族・自分の国家の利益の追求に走るのだろうか。今年の春のイラク戦争は、人類が後者の道を選択したことを示した、とても悲しい出来事だったように思う。

